

第一編

美しい自然うるわ

わが町は、高千穂を主峰とする霧島連山のふもとに広がる、四季おりおりの自然が息づく町である。この美しい環境に抱かれた天孫降臨の神話は、人々の心を悠遠なロマンの世界へと誘ってくれる。東西に流れる霧島川は、霧島山中に源を発し、溪流は岩をかみ滝をつくり、清流にはヤマメやアユが遊泳している。

永^{とこ}却^くの時が育てた霧島の山のはざまには、古代からの神秘をたたえた火口湖が点在し、歳月を経た赤松林の華麗さは、他に類を見ない景観である。山ふところのいたるところに湧きでる温泉は、訪れた人々を安らぎのなかに誘い込んでくれる。一斉に萌え立つ落葉樹林、小鳥のさえずりは、春を訪ねて散策する旅人を楽しませる。夏は緑したたる樹林海、木の間を縫う風のそよぎに森林浴の人は絶えない。ミヤマキリシマ、ハルリンドウは山路を飾り、ナナカマド、コハウチワカエデ、ヤマウルシなど、紅葉する秋。赤や黄に染められた美しさはまた格別である。冬を代表するのは、樹氷林の白銀の輝きである。風の音も、陽の光りと響き合いすばらしいメロディをかかなでる。ときどき冬鹿の優しい瞳に出逢^あうこともある。

このようなすばらしい自然は、わが町のシンボルであり、町民にとってかけがえのない財産であると同時に町民の誇りでもある。



赤 松 林

第一章 位置・面積

一 位置

霧島町は、東経一三〇度五〇分、北緯三一度四九分、始良郡の北東部にあって、東は曾於郡財部町と宮崎県都城市に、北は霧島連山を間において宮崎県えびの市・高原町、西は牧園町、南は国分市と隣接している。

二 面積

総面積八一三五平方詰で、東西九・一詰、南北一六・五詰である。総面積の内訳は、宅地一八三平方詰、田二七〇平方詰、畑一四五平方詰、樹園地七〇〇平方詰、国有林二四一九平方詰、私有林四〇四六平方詰、その他三七二平方詰となっている。



鹿児島県全図と霧島町位置図

第二章 地勢・地質

霧島町の地勢は、北に高千穂峯・中岳・新燃岳・韓国岳・大浪池などの、霧島火山群が高く連なり、これを南から遠望すると、東から高千穂峯・新燃岳・韓国岳を主峰とする三群に分かれている。町の南半分は二〇〇メートルから三〇〇メートルも堆積したシラス層であり、北東部が高く、南西部に向かって低い波状高地によって占められている。谷間是一般に深く切り立っており、地形は急しゅんで複雑な様相を呈し、平坦な地は極めて少なく、耕地は入水・牧内の丘陵台地の畑地と、田口の前田地区、大窪の桑原地区の水田地帯があるが、その他は山あいのわずかな水田や畑地だけで多くは山林におおわれている。

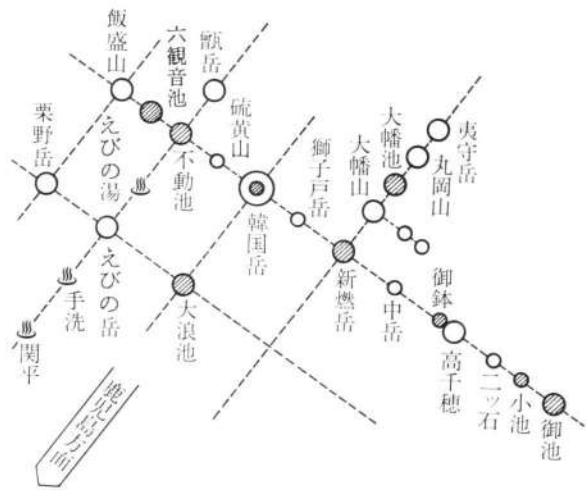
町の中央を貫いている霧島川は、韓国岳と大浪池の間に源を発して天降川に合流している。支流、狭名田川は狭名田・田口・待世を流れて霧島川に合流し、また狩川は猪子石・湯之宮・駅前を流れて梅北で霧島川に合流

している。

一 霧島連山の生いたち

霧島町の地形を、霧島連山の生い立ちと、始良カルデラ説によって考察すると、本県の陸地は、今から約一億九〇〇〇万年から七〇〇〇万年前、「中生代」のアルプス造山活動によってつくられたものであり、その基盤は、水成岩のところが多く、本町でも、市野々・宮下にこの層が見られる。「中生代」のジュラ紀から白亜紀にかけて西南日本外帯に厚く堆積した^{けつ}貢岩・砂岩の互層から成る水成岩の地層で、新生代初期の大きな変動を受けて激しく乱れている。

この代表的地層は、^{しまんとぞうぐん}四万十層群（四国四万十地方に広く分布する）とみなされている。約三〇〇〇万年前の新



霧島火山群配列図

生代第三紀の中ごろから相次ぐ火山の噴出で、「旧霧島火山帯」が形成された。この時期は、大小さまざまな規模で地盤の変動があり、第三紀層の堆積が行われている。ところが「第四紀」（新生代の後半で一〇〇〇万年前から現在まで）に入って旧霧島火山帯の東側に、現在の霧島火山帯が生まれた。

霧島火山は、多数の小規模な火山から成り立った複合火山で、完全火口一五、火口湖一〇、爆裂口八がある。東南の御池から北の飯盛山まで直径約二〇結、西の烏帽子岳から東の夷守岳まで一三結、山ろくの周囲は五〇〇結に達する日本有数の大火山地域を形成しているが、主峰高千穂峰一五七四結と、韓国岳一七〇〇結を結ぶ線は、西北―東南に走って、宮崎・鹿児島県の県境となっている。山腹は東北に下って宮崎県側にえびの市・小林市・都城市などの盆地をつくり、西南鹿児島県側は、牧園台地から鹿児島湾北岸のシラス台地群に続いている。この霧島山系の群峰は、高千穂峰の頂上から見ると、大体北から東南に二〇結の二大縦列をなしているが、この流れに直交する栗野岳―飯盛山と佐賀利山、えびの岳―白鳥山・額岳。さらに大浪池―韓国岳と烏帽子岳―新燃岳―大幡山―丸岡山―夷守岳を結ぶ四つの横列があり、この縦横の線上に多くの温泉が湧出している。

霧島火山帯の生い立ちは、相当複雑で諸説があるが、この地区に流入した始良火山の噴出物（シラスと熔結凝灰岩）によって古期と新期に分けることができる。古期のものはさらに栗野岳・安山岩類・白鳥安山岩類の二活動

期に分かれ、いずれも広大な楯状火山を形成したようである。古期火山としては、栗野岳（一〇九四^{メートル}）、新期火山は白鳥山北方（一三〇〇^{メートル}）、えびの岳（一三〇五^{メートル}）、獅子戸岳（一四二八^{メートル}）などにその一部を残している。

新期の火山活動は、高千穂を中心とする東部火山と韓国岳を中心とする西部火山群とが、それぞれの地域に別々に展開した。この東部火山群に属するものには、高千穂峯・新燃岳・御鉢などがあり、西部火山群には、韓国岳・大浪火山などがある。御鉢や新燃岳には、有史以来の噴火の跡がある。

旧霧島熔岩でできている火山は、御池・小池・韓国岳・大浪池・白鳥山・えびの岳・大幡山・夷守山・矢岳・竜王岳・獅子戸岳の一で、火山活動はみられない。これらの火山の成立はすでに終わり、山体も偏平で大きな火口や爆裂火口を有しているものもあり、ただ噴気孔や温泉に昔の名残をとどめている。

新霧島熔岩に属するものは、飯盛山・不動池・飯岳・硫黄山・丸岡山・新燃岳・中岳・二ツ石・高千穂峯・御鉢の一〇でその形体は円錐形、または釣り鐘型をなし、

あまり外界の破壊を受けていない。火口内は急斜しており、熔岩原も原形のままである。霧島の諸火山は一覧表のとおりである。

	火山湖	海拔(m) 山頂湖面	岩石	特 徴
一 佐賀利山	七六三	角閃安山岩	円頂丘または岩脈	
二 矢 岳	一三二	輝石安山岩	鐘状火山、径五〇〇 ^{メートル} の火口跡 山体の侵食著しい	
三 烏帽子岳	九八八	橄欖石 輝石安山岩	円錐丘、南東に開く火口跡	
四 湯の谷岳		安山岩質	南に開く径一・五 ^{メートル} の火口跡	
五 栗野岳	一、〇九四	安山岩質	西に開く火口跡	
六 えびの岳	一、三〇五	同 右	径六〇〇 ^{メートル} の火口、山ろくにノカイドウ	
七 獅子戸岳	一、四二八	同 右	山体は全く侵食される 西部に白色粘土質	
八 飯盛山	八四六	橄欖石 輝石安山岩	浅い小火口湖、最も新鮮	
九 白鳥山	一、三六三	玄武岩	浅い火口湖をもつ（白紫池） 冬季は凍結する	
一〇 六観音池	一、三〇〇		径五〇〇 ^{メートル} の火口湖	

一八 大幡池 一、一三〇	一七 夷守岳 一、三四四	一六 大浪池 一、二二九	一五 琵琶池 一、三三〇	一四 韓国岳 一、七〇〇	一三 硫黄山 一、三一〇	一二 不動池 一、二四〇	一一 飯岳 一、三〇一
輝石安山岩	橄欖石 輝石安山岩	橄欖石 輝石安山岩	紫蘇輝石安山岩	輝石安山岩	凝灰角礫岩	凝灰角礫岩	輝石安山岩
爆裂火口、径五〇〇呎、比高二〇〇呎、湖、水深一・二呎	コニード、北ろくに熔岩、台地頂上の火口は東壁を欠く	コニード、北ろくに熔岩、台地頂上の火口は東壁を欠く	韓国岳東北の爆裂火口径二〇〇呎	火口壁の比高一七〇呎	碎屑丘、火山弾多く、硫黄岩石の粘土化著しい	径一五〇呎の火口湖、P・H二・二強酸性	橄欖石
一九 大幡山 一、三三三	岩滓質の火口碎屑物	二重式火山、径五〇〇呎の火口をもつ中央火口	二重式火山、径五〇〇呎の火口をもつ中央火口	二重式火山、径五〇〇呎の火口をもつ中央火口	二重式火山、径五〇〇呎の火口をもつ中央火口	二重式火山、径五〇〇呎の火口をもつ中央火口	二重式火山、径五〇〇呎の火口をもつ中央火口

二七 白紫池 一、二七二	二六 御池 三〇五	二五 小池 四二〇	二四 二ツ石 一、三〇〇	二三 高千穂峯 一、五七四	二二 御鉢 一、四〇八	二一 中岳 一、三四五	二〇 新燃岳 一、四二一
右	右	右	右	右	右	右	輝石安山岩 その他
白鳥山の火口湖、冬季は凍結する	径一〇〇呎の爆裂火口湖、深さ一〇呎、湖岸二〇呎以上	径一〇〇呎の爆裂火口湖、深さ一〇呎、湖岸二〇呎以上	径五〇〇呎の火口、山体侵食ややすすむ	二重火山、第一次火山の火口を埋めて、第二次の活動があり頂上に火口なし	径六〇〇呎の火口、有史以来、しばしば活動、高千穂峯寄生火山火口の深さ二三四呎	二重式火山、外輪山には径七〇〇呎のカルデラの中火口丘には径二〇〇呎の浅い火口	ホーマテ径七五〇呎の火口湖、現在活動中

霧島地質の構造、噴出の順序

順序	岩石	位置	昇降	備考
1	生成未詳の成岩	小林付近の台地	昇 (火山活動)	砂岩、粘土板岩多い
2	安山岩(灰石)	小鹿野の台地		かたい第三期の旧期
3	含角閃知輝石安山岩	加久藤越の台地		
4	輝石安山岩	牧園町種馬所付近 栗野岳 烏帽子岳		ほぼ地盤ができた
5	旧霧島熔岩 火山灰砂 玄武岩	韓国 大浪 白鳥 蝦野 夷守岳	降 昇	
6	新霧島熔岩 火山灰 砂	高千穂御鉢 二ツ石 新燃岳 中岳・硫黄山など		現在のようになり、いまなお活動する山もある

(注) 霧島町郷土誌による

二 河川と流域

霧島火山帯は、地方水系に対する分水嶺をなし、大体三方に水を流している。一は大淀川で、火山の東部に源をなして日向灘に注いでいる。二は川内川で、火山の北

部から西へ流れ、東シナ海へ注ぎ、その三は、火山の南に源をなし、鹿児島湾に注ぐ天降川である。

天降川は、火山配列の方向と大体一致して、多数の支流を合わせながら流れている。それは東の方から国分市の郡田川・手籠川と、大浪池のすそを源流とする霧島川は、狭名田川・狩川などの支流を合わせ、町内を貫流し、小鹿野滝を経て松永川となり、新川と合流、国分の二川を併呑し巨大な川となる。これらの川は激しい浸食により霧島山南部地域に複雑な地形をつくっているのである。

新川の上流中津川は急流で、熔石をうがち丸尾の滝となり、轟木付近から灰砂層の上を流れて深い谷をなし、犬飼滝をかたちづくっている。また、金山川も横川・牧園付近でかなりの段丘をつくり峡谷となって流れる。これらが合流した天降川はだんだんその流れがゆるやかになり、国分平野を貫き海へと注ぐ。

川内川は、その源をえびの市北方の古い水成岩・灰岩地帯に発し、嶺岳・白鳥山から流れる支流を合わせて強い浸食作用により、多くの峡谷や段丘をつくって流れている。

大淀川もこれらの川と同様に、岩瀬川・辻の堂川・高

崎川・花堂川・安永川などの支流を集めて湊谷をつくりながら日向灘に注いでいる。

三 霧島火山地帯の岩石

中生層とされている水成岩

高千穂峯の南ふもと、荒瀬から高原への途中に露

出しているのは、泥板岩である。黒緑色で非常に硬い。加久藤の北方にも泥板岩・砂岩累層がみられるが、多くははげやすく硬い地層の、しわの多い岩石である。

新しい水成岩

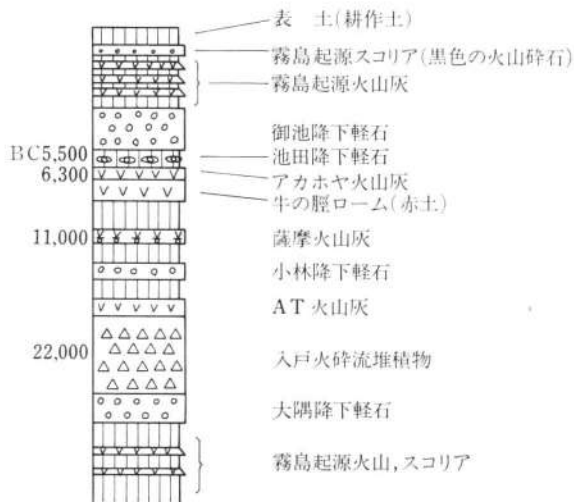
国分の北側の丘には、何ら変動を受けていない砂岩・粘板岩の互層があり、

共に軟弱である。えびの市の京町・加久藤の南方には、黒色の泥板岩・凝灰質の泥板岩が灰砂層を挟んで露出している。えびの市飯野の川内川北岸には、軽石を含んだ泥板岩・硅藻土・有孔虫の化石の混じった凝灰質の泥板岩がみられる。

安山岩玻璃(灰岩)

安山岩玻璃の硬いのを硬石とい

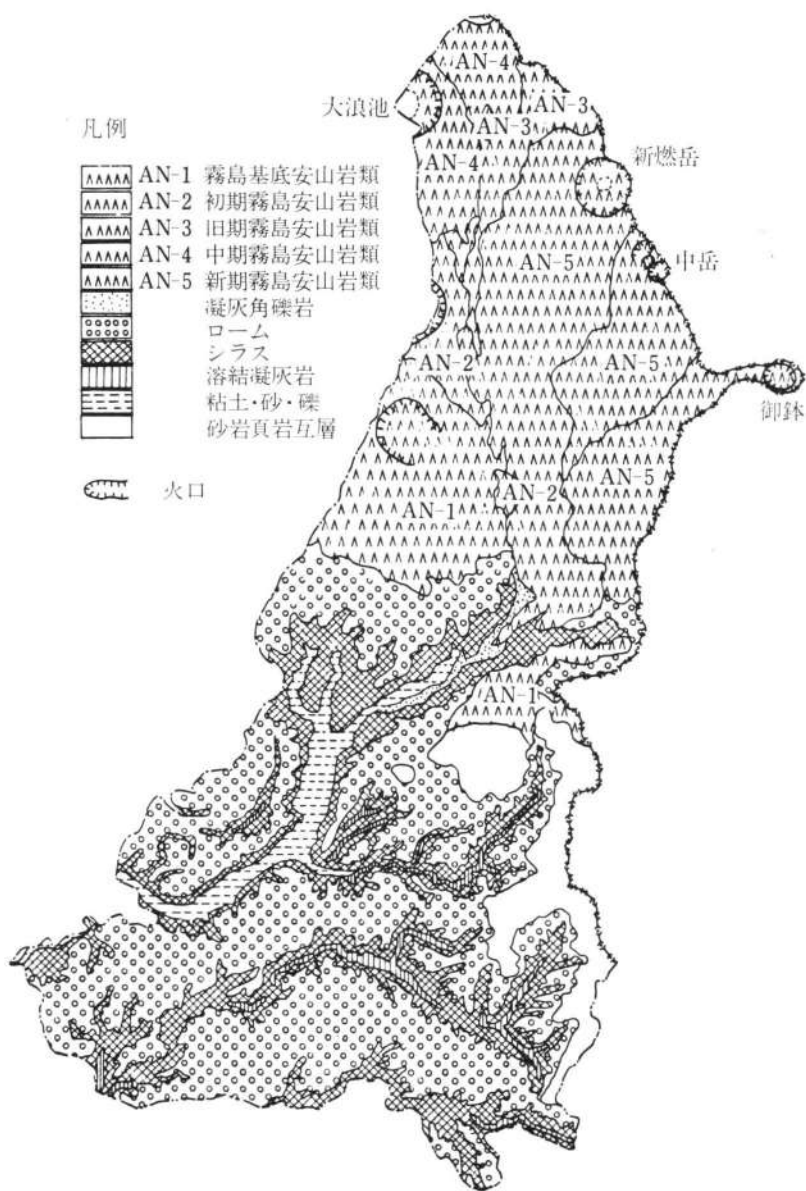
い、軟らかいものを灰岩といって、霧島火山が噴出したも



霧島火山周辺の地層模式柱状図

(備考) スコリア＝穴の多い多孔質の軽石状の黒い砕石。一般に黒い火山砕石 ローム＝砂、沈泥、粘土をほぼ等量を含む土

ののうち最も古いものとされ、国分市の北方、小鹿野付近、小林市北方によくみられる。岩石の外観は種々で含有鉱物も異なっている。灰白色・暗灰色があり、なかには黒曜石を多量に含みしま状をなしているのが大窪にある、小鹿野には柱状節理や板状節理を示すものがある。



霧島町表層地質図

輝石安山岩

栗野岳・牧園町種馬所付近に露出しており、霧島火山の土台をつくっている。栗野岳付近の岩石は肉眼でみると、石地は暗灰色であり、班晶として斜長石を多く含んでいる。牧園町種馬所付近のものは斜長石が少なく普通輝石・紫蘇輝石・橄欖石をみることもある。

玄武岩

烏帽子岳その他に露出。黒色で微細な石地をもっており、斜長石の微晶が散在している。まれに黒緑色の輝石が混じっているものもある。

霧島旧熔岩

韓国岳・大浪池・白鳥山などは、霧島旧熔岩で形成されている。色はほとんど暗灰色か黒色であって、斜長石・紫蘇輝石・普通輝石・橄欖石を含み、板状や柱状を形成し割れ目が露出している。牧園町栄之尾温泉にもこのような形成がみられる。

霧島新熔岩

霧島の新火山・二ツ石・高千穂・御鉢・中岳・新燃岳などは新熔岩で形成され、黒色または暗灰色をしている。岩質は旧熔岩に似ているが、普通輝石が旧熔岩より多い。新燃岳のものは、黒色多孔質で白い斜長石が散在し、輝石・橄欖石が含まれて

いる。石基は、褐色で玻璃質の多い中岳や御鉢の新熔岩と共に黒色で、斜長石や輝石を含んでいる。

第三章 気 象



樹氷 韓国岳から大浪池を望む

霧島は、その名の示すとおり霧や雨の特に多いところである。統計によると、霧島山ろくは一年をとおして気温が低く、夏は

涼しく冬の高千穂おろしは一段と厳しいものがある。毎朝、真っ白い霜がおり氷柱の列を見るのもめずらしくない。冷涼な気象状況を生かして別荘地が広がり、また、茶やしいたけなどが

霧島中学校調べの月別平均気温

月 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
昭和31	7.3	8.0	9.5	15.7	19.1	20.7	24.7	26.5	23.6	19.2	14.0	7.6
昭和40	4.6	7.8	11.0	14.2	17.8	21.0	25.8	25.0	20.0	16.0	14.5	6.8

特産物として生産されている。
霧島連山一帯は上昇気流が激しく、乱雲や霧の発生が多く、冬は美しい樹氷がみられる。

気象についての記録は、昭和四十年まで霧島中学校で行われていたが、現在、町内の調査資料が無いので、鹿児島県立農業大学（牧園町高千穂）の資料を提供してもらった。霧島山ろくとして同じような条件のもとにあるので、本町との差はほとんどないと考えられる。鹿児島島の気温は「鹿児島県統計年鑑」（平成三年刊行）よりのものである。鹿児島と霧島山ろくの

気象概況（平成元年1～12月）

月	月平均気温(℃)		日最高気温(℃)		日最低気温(℃)		月降水量(mm)	
	霧島山麓	鹿児島	霧島山麓	鹿児島	霧島山麓	鹿児島	霧島山麓	鹿児島
1	8.8	11.1	18.0	15.4	-3.5	7.0	156	138.0
2	7.8	11.1	17.0	15.4	-6.5	6.9	271	223.0
3	9.0	12.0	21.0	16.7	-3.0	7.6	138	139.0
4	14.7	17.3	23.8	21.6	0	13.0	356	77.0
5	17.1	19.8	25.8	23.5	9.0	16.8		234.5
6	20.0	23.0	29.0	26.7	10.0	19.7	288	252.5
7	24.1	27.1	31.0	30.8	15.0	24.2	689	491.5
8	24.9	27.8	30.6	31.6	17.0	24.9	222	118.5
9	22.9	25.9	31.0	29.8	13.0	22.6	481	387.0
10	17.6	19.8	26.8	25.4	6.5	14.8	26	18.0
11	13.0	15.0	24.5	20.0	1.0	10.3	19	36.0
12	7.8	10.4	18.0	15.9	-1.5	5.6	31	36.5
年平均	15.6	18.4	24.7	22.7	4.8	14.5	年計2,677	2,151.5

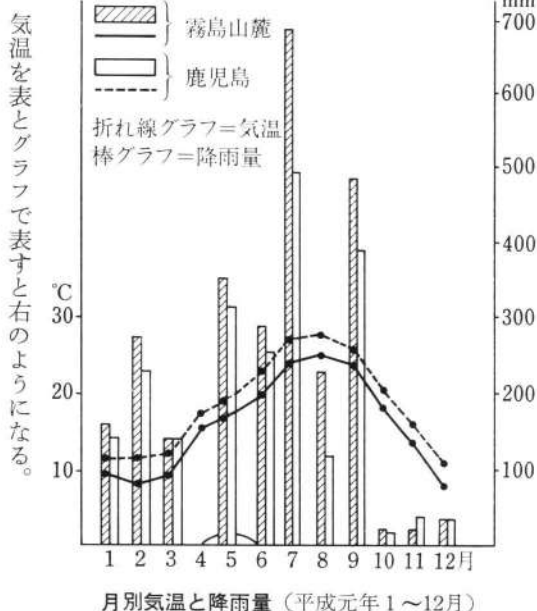
霧島山麓＝鹿児島県立農業大学（牧園町高千穂3311）

鹿児島＝鹿児島県統計年鑑（鹿児島県統計協会発行）

昭和二十四年（一九四九）八月十五日のジュディス台風は、志布志湾に夜九時ごろ上陸、最大瞬間風速四〇級の強い風と、霧島連山一帯に豪雨をもたらした。牧園町硫黄谷の霧島館は、がけ崩れのため一瞬にして全壊、多収録した。

台風と豪雨

鹿児島県は、台風の通過路としてよく知られている。ここでは、上陸または近海を通過した台風の中から、本町に関係のあるものだけを収録した。





霧島川のはんらん（昭和54年7月大窪地区にて）

量の泥土に押しつぶされ三十数人の死者を出した。

昭和二十六年（一九五一）

十月十四日午後七時ごろ、串木野付近に上陸したルース台風は、最大瞬間風速五四・二節を記録した大型台風であった。満潮時と重なったために、枕崎・串木野などを中心に死者一二六人、行方不明者八三人におよんだ。本町においても稲の収穫期を目前にして、農作物などの被害は大きなものであった。

昭和四十六年の台風一九号は、八月四日から同六日にかけて全九州を襲い、平均風速三〇節の暴風圏にスッポリとはいり大きな被害を残した。

霧島山系北部を中心に五日か

ら六日にかけて集中豪雨、牧園町では死者七人の犠牲者が出た。本町は、幸いに次のような被害にとどまった。

重傷一人・住宅全壊一戸・住宅半壊三戸・田の流失及び埋没一畝・畑の流失及び埋没一畝・道路のかけ崩れ七四か所・水道破裂四か所

昭和五十四年七月十六日から十七日にわたり、霧島山系を中心に集中豪雨、特に十七日正午からの一時間に四五・六〇節の豪雨を記録した。これによって霧島川がはんらん、かつてない被害を受けた。床下浸水七〇戸・家屋崩壊一戸・家財流失一戸・護岸決壊一一か所・水田流失三畝。

主として大窪・梅北・労災宿舍地区に集中した被害であった。

大窪では、堤防の決壊によって一軒が全壊して家財道具がほとんど流失してしまった。なお、中央公民館前の待世橋に流木がかり、県道にあふれた濁流は梅北集落を襲い、床下浸水多数を出した。

第四章 動植物

第一節 動物の分布

霧島連山の一部は禁猟区に指定されるなど、鳥獣の保護政策が進められている。一方、気温や降水量の関係など、豊かな自然条件がそなわっているため、動植物の宝庫となっている。

以下、山野に生息するものを列記すると、次のとおりである。

一 山ろく地帯

鳥類

キジ・アカヤマドリ・コシジロヤマドリ・カラス
・シジュウカラ・スズメ・ヒバリ・ヒワ・コジュケイ・

ヒヨドリ・ツグミ・モズ・トビ・カッコウ・ホトトギス・アカシヨウビン・ホオジロ

昆虫類

チョウ（アゲハ・シロ・キ・ツマグロキ・モンキ・ウラナミシロ・ツマキ・ツマベニ・シジミ・タテ

ハ・マダラ・ジャノメなど）、ガ・キリギリス・スズム

シ・クツワムシ・ウマオイ・コガネムシ・タマムシ・セ

ミ類・トンボ類・カミキリ類

哺乳類

ウサギ・モグラ・サル・コウモリ・ネズミ・イタチ・イノシシ

爬虫類

トカゲ・カナヘビ・ヤマカガシ・ジムグリ・シマヘビ・カメ・スッポン

二 きょう木地帯

鳥類

トラツグミ・クマタカ・ブッポウソウ・コノハズ

ク・オオルリ・キツツキ・ヤマバトなど

昆虫類 山ろく地帯に同じ

哺乳類 シカ・カモシカ・イノシシ・ムササビ・タヌキ

・リス

爬虫類 マムシ・シマヘビなど山ろく地帯に同じ。その

他カメ・スッポン

両生類 イモリ・サンショウウオ・ヒキガエル・アカガ

エル

三 かん木地帯

高等動物はまれで、昆虫類が集まってくる。池にはマ
ガモ・ユガモ・オシドリなどが飛んでくる。

四 水 中

アブラハエ・コイ・メダカ・アユ・ウナギ・カワニナ
・ヤマメなど

五 珍しい動物

ニホンカモシカ 海拔一〇〇〇〜二五〇〇呎の亜高山帯

から高山地帯にかけ、単独あるいは雌雄ですむ。角は雌雄いずれにもみられ、一五歳ほどである。体色は地域により黒色に近いものから、全身白色またはオレンジ色など、種々みられる。えさは草あるいは木の葉。日本特産の哺乳動物として知られ、特別天然記念物に指定されているばかりでなく、国際保護動物にも指定されている。地方によっては、クラシシ・アオシシ・シシなどと呼ばれている。体長、六八〜七二センチ、体重、二八キロ。分布、本州・四国・九州（哺乳綱偶蹄目）ウシ科。

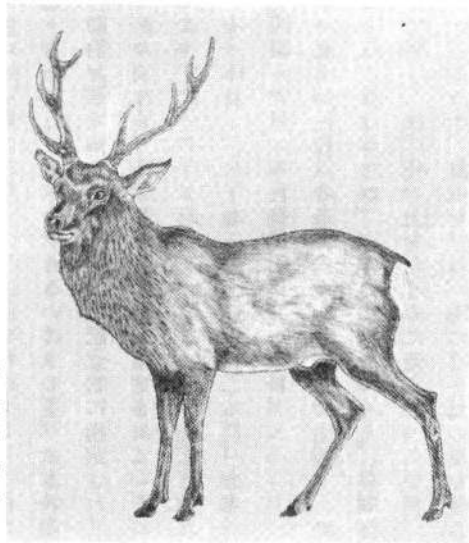
ヤマネ 低山から高山の森林にすむ。樹上で生活し、地上に降りることは少ない。木の枝に巣をつくり、昼間はその中で眠り、夜、枝の上をたくみに走り回って果実、木の葉などのほか、昆虫を好み、時には小鳥の巣を襲うこともある。リスのように、枝から枝へ飛び移ったり、後肢で枝に逆さにぶら下がったりできる。メスは六月から十月ごろまで、一産三〜七子を、数回出産する。十〜

十一月ごろから、木のほらで冬眠する。冬眠のさいには、地下に巣をつくってそれを使うこともあるらしい。体長七センチくらい。分布は本州・四国・九州。

コシジロヤマドリ キジ科のヤマドリで、雄は全長一三〇センチくらい、雌は五五センチ。雄は全体茶褐色で、赤銅黄金色の光沢があり、下面は淡色、腰から尾筒は白色（生息地により個体差がある）、尾羽は九〇センチ以上になる。雌は雄より尾が短く、赤褐色が少ない。山地の広葉樹林・針広混林に生息し、秋・冬には数羽一〇羽くらいの群れでいることが多い。早朝溪流の水を飲み、果実・茎葉、ナメクジ・ミミズなどを食べる。三〜五月に七〜一三個の卵を産み、雌が抱卵後二四日で孵化する。本土と宮崎県・熊本県南、つまり霧島山系に分布するが数は少ない。

ブッポウソウ 夏鳥で、三宝鳥とも呼ばれ、五月ごろ日本に渡ってくる。形が美しく鳩より小さい。インコウのような濃い緑の色をして頭は黒く、のどと翼と尾とは濃い紫色である。翼には銀青色の大きい紋があり、飛ぶと白くみえる。足とくちばしは美しい赤色である。「ブッポウソウ」と鳴かず、「ギアーギアー」と鳴く。老杉や

ヒノキの朽ちたほら穴に巣をつくり、三個くらいの卵を産む。霧島神宮や狭野神社付近によくみられるので有名。



シカ 雄は骨質で枝状の角をもつ。毎年落ちて袋角となり秋に堅い角になる。日中は茂みで休み、朝夕になわばりで餌をとる。霧の深い日はすぐ近くで見られる

第二節 植物の分布

霧島山一帯は南国的な気温と豊かな雨量のため、南国らしい美しい森林が生い茂っている。また、神聖な山々や神秘さをたたえた多くの湖水が、美しい植物とともに登山者の目を楽しませてくれる。これらの中には学術的にも貴重なものがあるし、暖帯と温帯の植物が入り混じっているという特色がある。

その主なものをあげると、次のとおりである。

一 山ろく地帯（三〇〇〜八〇〇呎）

草原 ススキ・トダシバ・チガヤ・オガルカヤ・ヤマハギ・ネコハギ・メトハギ・カワラケツメイ・オカトラノオ・コマツナギ・アキノキリンソウ・ワラビ・ゼンマイ・ヨモギ・ヤマゴボウ・ウド

常緑広葉樹林帯 タブ・クス・イス・アカガシ・ウラジロガシ・シイ・ヤマツバキ・シキミ・ユズリハ・サンゴ

ジュ・サカキ・ヒサカキ・スギ・ヒノキ・ドクダミ・ツルウメモドキ・サネカズラ・イワカガミ・ホウライカズラ・ツルグミ・サルトリイバラ・シノブ・カタヒバ・ヒトツバ・セキコク・マメラン・マタタビ・ヤマノイモ・ヌスビトハギ・カラスウリ・サザンカ・タケ類・オオバコ

二 中腹地帯（八〇〇〜一三〇〇呎）

モミ・アカマツ・ヤブニツケイ・ケヤキ・カクレミノ・ハゼノキ・ホオノキ・チシャノキ・コパンノキ・コマユミ・イヌツゲ・ネジキ・ツリバナ・シラキ・キフジ・モッコク・ハイノキ・クロズル・ヤブイバラ・カタバミ・クサギ・ヤブコウジ・フモトスミレ・ツクシゼリ・ヒヨドリバナ・マツカセソウ・ヘクソカズラ・ムベ・ツガ・イチイ・ブナノキ・サワフタギ・ミヤマシキミ・イヌツゲ・ナツツバキ・ツラキ・ネム・ハリギリ・リョウブ・ヒメシヤラ・ナナカマド・ミヤマシグレ・マンサク・タラノキ・シラキ・ブナノキ・コナラ・ヤシヤブシ・ウツギ類・ヤマハンノキ・ノブドウ・シダ類・リンドウ・ヒ

カゲツツジ・エンコウカエデ・マイヅルソウ・アブラガヤ・ホソイ・ミズヒエ・ミズゴケ・イタドリ・キイチゴ・ササ・ドクダミ・クズ・ミズヒキ・メダケ・アケビ・ツタ

三 貴重な植物

①ミヤマキリシマ（大事な文化財であり、六月上旬ごろ満開のころは実に美しく、観光客を喜ばせ、学問上からも保護が必要）

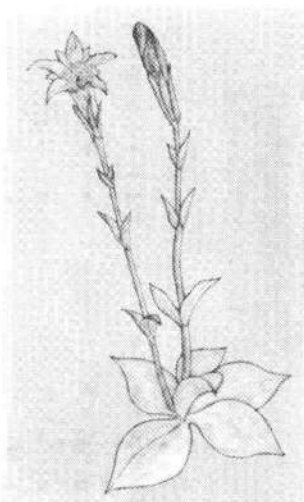
②エビノノカイドウ

③ツチトリモチ

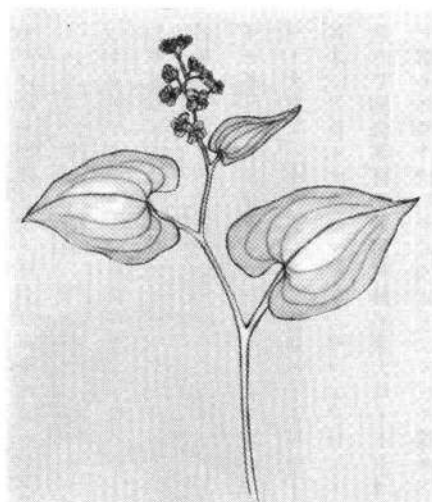
④サクラソウ

⑤紅葉（カエデ類・ウリハカエデ・ヤマモミジ・ヌルデ・ウルシ類・キリシマミズキ・ミズナラ・コナラ・ハリギリ・クヌギなど）

⑥赤松林



ハルリンドウ 山頂近くまで広く分布。
5～6月の登山者の目を楽しませる可憐な草花。霧島はその分布の南限にあたる



マイヅルソウ 霧島の山ではどんな荒地でも育つ可憐な草花である。ハート型の葉が、鶴が舞っている姿に見えることからこの名がつけられた

第五章 霧島山の噴火の歴史

記録にみられる霧島山の噴火の歴史をまとめると次のとおりである。

○天平十四年（七四二）

十一月壬子大隅国司言す。今月二十三日未より二十
八日に至る空中声あり。大鼓の如し。野雉相驚き地大
に震動す。丙寅使を大隅国に遣わす（続日本紀）

○延暦七年（七八八）

秋七月己酉、大宰府言す。去三月四日、戌時、大隅国
嘯喉郡曾乃峯上に当り、火災大熾響雷動の如し。亥時
に及び火光稍止み唯黒烟をみる。然る後沙を雨し、峯
下五、六里沙積委積可二尺（約六十寸）甚色黒焉（続
日本紀）

○天慶八年（九四五）

僧性空霧島山に登り、法華経を誦して神に祈ること七
日を期す。居ること五日にして山震動し、猛火熾んに

して暫くも止るべからず。天歴中に至りて性空煙火を
さけて、迫門丘の神廟を西北二里許（約八里）の地に
遷す（襲山考）

○天永三年（一一一二）

●二月二日霧島山西峰、噴火。霧島山上大に燃え、神
社焼けず（霧島東神社錫杖院縁起）

●二月三日、山上大いに燃えて、神社その災にかかる
（薩隅日地理纂考）

○仁安二年（一一六九）

霧島山噴火、西生寺殿堂焼崩す（県史）

○寿永二年（一一八三）

十二月十七日大隅国霧島山噴火す（旧郷土誌）

○文歷元年（一二三四）

●十二月二十八日、霧島大いに燃え神社寺院悉く焼亡
す（狹野神社社伝）

●十二月二十八日、霧島山発火甚だ盛にして、祠宇皆焼失す。尚日本地理資料には（霧島山噴火）社寺什宝等悉く焼失す（県史）

○大永四年（一五二四）

是歳大隅霧島噴火（地学協会）

○天文二十三年（一五五四）

霧島山又火を発す（県史）

○永禄九年（一五六六）

九月九日、霧島火を発し人多く焚死す（島津国史 県史）

○天正二年（一五七四）

霧島山神火を発し、天地震動す（襲山考）

○天正四年（一五七六）

霧島山神火を発す。天正四年より六年に至りまた炎ゆ

（^{げい}魔藩名勝考）

○天正十五年（一五八七）

四月十七日、霧島の神火震動す（旧郷土誌）

○天正十六年（一五八八）

三月十二日、霧島山上神火を発し、申酉の間大地震

（旧郷土誌）

○慶長三年（一五九八）～五年の間
炎上（^{げい}魔藩名勝考）

○慶長十八年（一六一三）

慶長十八年より翌年まで炎、同十九年諸国大地震（^{げい}魔藩名勝考）

藩名勝考）

○元和三年（一六一七）

元和三年より翌年に至る（^{げい}魔藩名勝考）

○寛永五年（一六二八）

九月二十九日霧島噴火し社寺宝物焼亡す（薩隅日地理纂考）

○寛永十四年（一六三七）

丁丑より翌年に至る（^{げい}魔藩名勝考）

○万治二年（一六五九）

万治二年己亥正月より寛文元年（一六六一）十二月に至る（県史）

○寛文二年（一六六二）

寛文二年八月より火を發して同四年（一六六四）三月に至る（^{げい}魔藩名勝考）

この年九月十九日三時、大隅地大に震ひ海嘯起り、山崩れ地裂く、陸地海となる（日本震災凶謹改）

○延宝五年（一六七七）

霧島山神火起（古年代記）

○延宝六年（一六七八）

正月九日同神火起（古年代記）

○元禄三年（一六九〇）

六月、霧島山噴火、降灰数日に及ぶ（日本震災凶鑑改）

○宝永二年（一七〇五）

十二月十五日、霧島山噴火、神社塔等悉く焼失す（薩隅日地理纂考）

○享保元年（一七一六）

二月十八日、霧島三山噴出致し百万の雷一度に轟くばかり、黒煙は一千丈許も上り地は震動してやまず、尚噴火の煙は砂混りて、是より火口は両部の池の方に移り、同年三月六日に至り、両部の池堤は裂壊し終り、池は一つにあり、噴火ますます激しくなりゆきたり（霧島東神社記）

○享保元年（一七一六）

九月二十六日、夜半ころより霧島の西岳震動して、周囲三里半程、処々に噴火破裂し、為に其の地内にある所の山林及び神社仏院等は悉く焼失し、其の他災害を

被りしもの、外域（外域とは一ヶ郷を言）一二焼失し、この家数は六〇〇軒、負傷者三一人、斃死の牛馬四〇五頭、田畑六二四〇八段六畝一九步、此の農産高六六一八二石余（官報）其の後三十四年の間灰下りて恰も春霞の如くなりしと言う（日本災異誌）。また「日本震災凶鑑改」には、享保元年の噴火について、二月霧島噴煙を始む。九月霧島山爆発して堂守、降灰四日に及び近傍の田畑埋没す。と書いてある。また『県史』には、享保一年十二月二十六日、霧島山新燃大に爆発す。田畑損じ、人馬死失す。と記してある。

○享保元年（一七一六）

九月二六日ヨリノ炎上甚シク、東霧島神社、狭野神社、瀬戸尾神社、及ヒ高原・高崎・小林等の諸郷コトゴトク焚タリ。又習年正月大イニ炎テ連日熄ス。焼石虚空ヨリ隕チ沙石糖ヲ簸ルカ如シ（県史）

○享保二年（一七一七）

一月三日、霧島山噴火、新燃又大燃有り、此以後七日より十一日迄、打続大燃彼辺火石にて家屋焼失、錫杖院寺家焼残ず、田畑石灰にて降埋、牛馬過分死失、高原、高崎両所役人共迄方々へ引越居候、旧臘、二十六

日より当正月十一日迄度度大燃日向国諸郡の内諸所
損失致す次の通、田畑一三万六三〇〇坪余、石砂灰入
高三万七九五〇石余、雜穀一五四〇石、堂宇一―宇
寺、家三〇軒、寺門前五三軒、社家二六軒、百姓一四
軒、死人男一人、けが人三〇人、死牛馬四二〇匹（巖
島福之助編纂鹿児島噴火書類）

○八月十五日、霧島山大いに火あり、硫黄地より迸り。

大石空に跳り火氣炎々として昼夜絶ず。その響迅雷の
如し。土灰近国に飛び近郷日を埋むること数十里、衆
恐怖しあるいは以て神怒れるとし、あるいは神火と称
す。こうして相次ぐ噴火に、土民恐れおののいたの
で、国主島津吉貴（二十一代）は國中に命じて、怪異
説、神火説を禁じ、僧徒がこれに乗じて供物を求め
て、祈禱しているのを聞きこれを禁じたので、国中大
いにこれに服し、怪異説も止んだという事が残ってい
る（西藩野史）

○明和九年（一七七二）

諸郡ノ諸邑民屋田園災ヲ被ルコト十三万六十三区ト
云ヘリ、上古火勢押テ察ルヘシ（薩隅日地理纂考）

○文政四年（一八二一）

十二月二十日朝、中岳の絶頂より火を發し、晩方に相
成り、黒煙おびただしく炎上り、近辺の地までも震動
致し候云々（震災予防調査会所載、伊地茂七氏より今
村博士に提供せられし文書）

○明治十三年（一八八〇）

九月、霧島山御鉢より爆発す。爾後蒸氣硫煙を噴出す
（薩隅日地理纂考）

○明治二十一年（一八八八）

一月二十七日、西曾於郡霧島岳鳴動、噴火飛灰五里内
の村落に降下す（凶荒誌）

○明治二十二年（一八八九）

十二月十日、霧島岳噴火、響激雷の如く黒煙忽ち天に
張り、火石は硫黄灰に燃え移り、延焼熾なり（凶荒誌）
十八日午後零時半頃より爆発愈々猛烈となり、降灰地
上に二、三分爾後激変なし。

○明治二十四年（一八九一）

六月十九日、霧島山爆発、降灰のため、草木の葉を凋
枯す（薩隅日地理纂考）

○明治二十八年（一八九五）

十月十六日、霧島山爆発、噴火時刻午後零時二十六分

一六秒、家屋三三軒焼失す。四人惨死す（鹿児島県災異誌）

○明治二十九年（一八九六）

三月十五日、霧島山爆発、フランス海軍士官一名負傷す。案内者一名死す。

○明治三十一年（一八九八）

十二月二十六日、霧島山爆発、宮崎・松山・高知等に爆音をきき降灰あり。

○明治三十三年（一九〇〇）

二月十六日、霧島山爆発、五名死傷者あり（鹿児島県災異誌）

○明治三十六年（一九〇五）

十一月二十五日、噴火。

○大正二年（一九一三）

十一月八日、霧島火山は、本八日午後十一時三十分頃突然大鳴動を起し、火焰高く天に昇り、引続き降灰ありたりと言う。

○大正三年（一九一四）

一月八日、午前二時二十分頃爆発す。宮崎にて、戸、障子震動す。宮崎県北諸県郡西嶽村（現都城市）に栗

の実大の石を降らし、始良郡東襲山村には降灰あり。

人畜に対し被害なし（この年一月十二日に桜島が大爆発をしている。十一月八日、午後十一時頃霧島山爆発し鳴動起る。宮崎県下に少許の降灰ありたり）。

○昭和三十四年（一九五九）

二月十七日、新燃岳爆発、大噴煙を噴き上げ、新燃のミヤマクリシマ全滅の危機にひんす。

○平成三年（一九九一）

十一月十三日から地下微動が観測され、同十五日第一回火山情報が出された。同二十六日から新燃岳登山禁止となる。

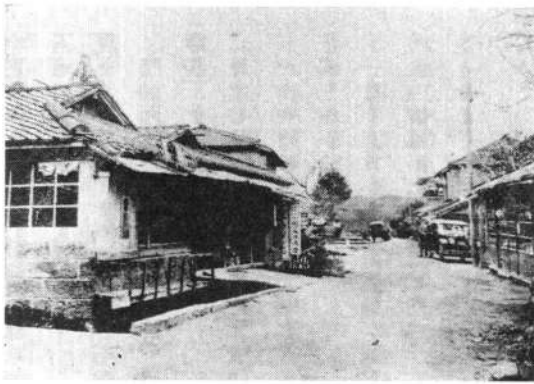
第六章 人口・世帯

第一節 集 落

一 昔からの主な集落

大 窪

古くから塩などの生活物資を運ぶ要路でもあった大窪は、関之坂の難所を行き来する人たちの休憩地としてにぎわったことが想像される。藩政時代は庄屋の所在地であり、また、小林・高原方面からの年貢米の中継基地として薩藩大窪御蔵も置かれていた。明治七年（一八七四）に東襲山村大窪郵便取扱所が開局され、大正一〇年（一九二一）には巡査駐在所も設置されたりして、明治・大正時代にかけて、東襲山村時代の上場における商工業の中心地となった。その



旧大窪商店街

ころの町並みを列記すると、旅館三、呉服屋三、鍛冶屋三、菓子製造一、仕立屋（洋服）二、床屋（理容）二、下駄屋（製造）二、小間物屋（洋品）一、自転車屋一、時計屋一、食料品店二、医院一、染物屋（くやどん）一、線香屋一、桶屋一など商工業の集落であった。さらに国分駅からの交通機関として、定期客馬車屋二

軒も大窪にあった。関之坂を越えて来た人たちや荷車などは、必ず休憩する場所として大窪茶屋と呼ばれ、霧島神宮参拝客や、霧島演習地にくる歩兵四十五連隊の兵隊の休憩の場所でもあった。大正末期の戸数・約八〇戸、人口四二〇人前後であった。

田 口 明治二十二年（一八八九）四月、市町村

制が施行されるまでは、戸長役場・庄屋の所在地として、田口村の中心地であった。明治二十九年（一八九六）には、初めての駐在所も設置された（後に大窪に移転）。明治四十一年（一九〇八）の総戸数は三五戸と記録に残っているが（田口土地総代台帳）、その後東襲山村時代の穀倉地帯であった。「前田ん田んぼ」を背景に、人口も増加を続け、昭和二〇年（一九四五）代は戸数一一〇戸・人口五三九人の集落を形成した。その間、酒造業、製材所、製茶工場、線香工場、鍛冶屋、自転車屋、金物屋、薬屋、医院なども定着してきたが、霧島神宮駅の開設により、大窪・田口共に衰退している。

栢

田

栢田は明治以前は、四、五戸しかないと
ころであったが、明治の初めに廃仏毀釈
が激しくなり、川辺地方からの仏教信徒の移住が始まっ

た。隠れ念仏の洞窟ではないかといわれている洞穴が栢田の霧島川のはとりに残っている。明治二十九年（一八九六）、県道の開通により、県道沿いに集落が形成され、荒物雑貨店、呉服衣料二軒、製材所などができた。現在、戸数九七戸・人口三三六人の集落である。

二 新しい集落



旧霧島神宮前旅館通り

駅前（駅前の名称は、駅の前ということで集落名）・梅北の集落は、昭和五年（一九三〇）、日豊線が開通して、霧島神宮駅が開設されてから、町内外の移住者により急速に発展した集落

である。駅前はそれまで「符集^{かあづまい}」という名で呼ばれ、符

をする時に勢子の集まる場所だったと伝えられている。

駅ができるまでは、六軒の農家（現在の農協の裏通り）

があるだけの湿地地帯の寂しいところであった。現在の

梅北も、大田小学校正門前の道路から西の方は一〇軒内

外の家しかなかったところであったが、駅を中心に町内

外からの移住者により、駅前を含めて霧島町の政治経済

の中心地となった。現在、梅北と駅前を合わせて、戸数

一七五戸・人口五三七人の集落となっている。戦後、大

窪町営住宅団地、待世の労災病院住宅団地、永水町営住

宅団地、サンビレッジ住宅団地、遠見塚団地など、大小

の住宅集落が建設された。

霧島神宮周辺の集落は、初め、神宮境内に旅館やみや

げ物店があり、点在する農家を含めて十数戸であった

が、昭和二年（一九二七）の大参道改修着工の折、今の

地に移転した。昭和五年（一九三〇）、霧島神宮駅開設

とともに神宮参拝客や登山者も増え、現在のような門前

町の様相を形作ってきた。

第二節 人口・世帯数

霧島町は地形的に山岳地帯で、東は霧島連山、西は関之坂、小鹿野滝の溪谷と、周囲を山に囲まれた交通不便の地であった。明治十年（一八七七）、西南役で重久の戸長役場が官軍の駐屯所になり、古い資料は消失した。

その後の記録は昭和二十三年（一九四八）、重久役場が焼失してしまったため、資料がなく古い人口の動態は不明である。

一 人口・世帯数の推移

霧島町の人口は、次表のとおり四〇年近く減少の傾向をたどってきているが、昭和三十年（一九五五）四十年代にかけて、高度経済成長に伴う農村人口の流出、特に青壮年層が都市の商工業に吸収された結果である。昭和五十年代になると減少傾向はゆるやかになり現状維持の状態である。表に示すとおり、昭和四十年代に比べて人

昭和25年以降の戸数・人口

年	戸 数	男	女	計
昭和25	1,634	4,124	4,157	8,281
30	1,653	4,063	4,159	8,222
35	1,616	3,963	4,078	8,041
40	1,675	3,547	3,809	7,356
45	1,814	3,157	3,653	6,810
50	1,869	3,035	3,420	6,455
55	1,921	2,901	3,291	6,192
60	2,016	2,897	3,186	6,083
平成2	2,127	2,819	3,189	6,008
3	2,194	2,846	3,199	6,045

口は減少しているが、逆に世帯数は増加している。このことは、核家族化が確実に進んでいることを示し、もう一つは、出産率の低下も大きな要因となっている。また、集落の人口の減少は、農村地域で特に目だっている。集落が消失した新湯は、営林署の合理化で宿舎がなくなったためであり、猪子石は三六戸の開拓農家が離農して、別荘地に変わりリゾート化が着実に進んでいる。

昭和二十五年に比べると約二〇〇人も人口が減少している中で高齢化がすすみ、六五歳以上が二〇六人で町内人口に占める比率は、一九・九五割に達している現状である。

集落別世帯数・人口調べ

集 落 名	年 度	世 帯 数	男	女	計
牧 神	昭和41. 6 平成 3. 6	26 43	64 62	61 77	125 139
牧 内	昭和41. 6 平成 3. 6	17 5	38 4	35 4	73 8
入 水	昭和41. 6 平成 3. 6	54 51	135 74	133 74	268 148
笹 之 段	昭和41. 6 平成 3. 6	53 49	103 69	137 71	240 140
梅 之 木	昭和41. 6 平成 3. 6	26 24	57 34	59 40	116 74
市 野 々	昭和41. 6 平成 3. 6	44 39	95 53	78 56	173 109
永 野 田	昭和41. 6 平成 3. 6	17 12	21 13	29 16	50 29
北 永 野 田	昭和41. 6 平成 3. 6	23 14	43 17	45 20	88 37

集 落 名	年 度	世 帯 数	男	女	計
上 春 山	昭和41. 6 平成 3. 6	6 9	11 10	15 13	26 23
床 浪	昭和41. 6 平成 3. 6	10 9	27 6	28 8	55 14
向 田	昭和41. 6 平成 3. 6	42 47	80 65	99 78	179 143
豊 後 迫	昭和41. 6 平成 3. 6	30 36	54 48	65 59	119 107
川 北	昭和41. 6 平成 3. 6	61 69	131 107	138 107	269 214
大 窪	昭和41. 6 平成 3. 6	101 116	172 143	202 188	374 331
駅 前	昭和41. 6 平成 3. 6	87 109	180 154	192 188	372 342
湯 之 宮	昭和41. 6 平成 3. 6	108 103	236 155	238 150	474 305
梅 北	昭和41. 6 平成 3. 6	60 70	136 92	137 97	273 189
待 世	昭和41. 6 平成 3. 6	81 100	150 125	154 155	304 280
新 地	昭和41. 6 平成 3. 6	33 36	56 44	72 54	128 98
田 口	昭和41. 6 平成 3. 6	111 147	224 205	267 226	491 431
堀 之 内	昭和41. 6 平成 3. 6	62 75	149 107	166 121	315 228
狭 名 田	昭和41. 6 平成 3. 6	69 68	174 94	151 101	325 195
市 後 柄	昭和41. 6 平成 3. 6	15 17	32 28	34 29	66 57
栢 田	昭和41. 6 平成 3. 6	87 96	198 153	232 178	430 331
野 上	昭和41. 6 平成 3. 6	58 61	137 91	138 97	275 188
遠 見 松	昭和41. 6 平成 3. 6	38 65	80 88	92 107	172 195

第六章 人口・世帯

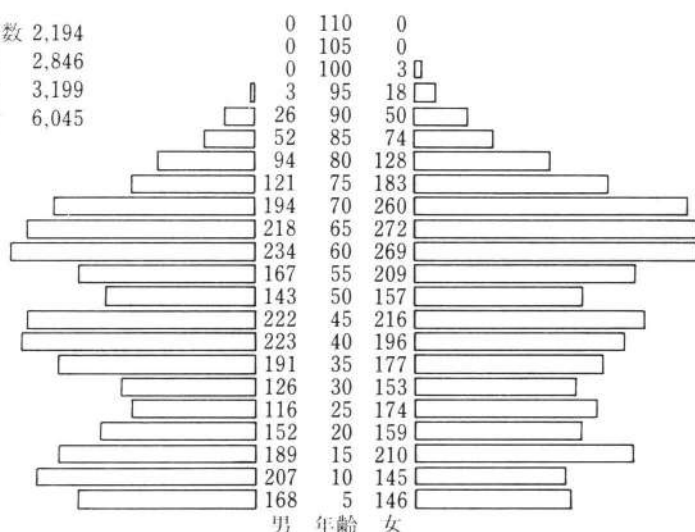
集 落 名	年 度	世 帯 数	男	女	計
高 千 穂	昭和41. 6 平成 3. 6	47 55	93 67	101 80	194 147
萩 谷	昭和41. 6 平成 3. 6	41 37	92 57	87 62	179 119
新 梅 北	昭和41. 6 平成 3. 6	20 33	53 64	48 49	101 113
泉 水	昭和41. 6 平成 3. 6	19 22	29 39	22 46	51 85
峯 之 前	昭和41. 6 平成 3. 6	10 18	38 36	59 31	97 67
霧 島	昭和41. 6 平成 3. 6	76 63	141 86	148 93	289 179
東 多 羅	昭和41. 6 平成 3. 6	37 34	56 38	62 46	118 84
永 池	昭和41. 6 平成 3. 6	35 33	75 36	96 45	171 81
新 湯	昭和41. 6	12	21	20	41
労 災 病 院	昭和41. 6 平成 3. 6	33 30	28 0	29 30	57 30
大 窪 団 地	昭和41. 6 平成 3. 6	20 31	35 48	39 43	74 91
鉄 道 官 舎	昭和41. 6	12	27	21	48
猪 子 石	昭和41. 6	36	73	70	143
軽費老人ホーム	平成 3. 6	28	13	18	31
サンビレッジ団地	平成 3. 6	39	57	60	117
労 災 宿 舎	平成 3. 6	10	19	10	29
杉 安 病 院	平成 3. 6	16	3	16	19
個 人	平成 3. 6	275	242	256	498
昭 和 41. 6 計		1,717	3,544	3,799	7,343
平 成 3. 6 計		2,194	2,846	3,199	6,045

人口統計表 (平成3年6月末日現在) (世帯数 2,194 男 2,846 女 3,199 計 6,045)

年 齢	男	女	計	年 齢	男	女	計
0歳	31	21	52	55歳	53	42	95
1歳	33	35	68	56歳	45	55	100
2歳	34	26	60	57歳	45	66	111
3歳	30	38	68	58歳	45	59	104
4歳	40	26	66	59歳	46	47	93
5歳	46	27	73	60歳	41	57	98
6歳	41	23	64	61歳	53	51	104
7歳	38	30	68	62歳	47	63	110
8歳	35	35	70	63歳	42	53	95
9歳	47	30	77	64歳	35	48	83
10歳	34	44	78	65歳	44	56	100
11歳	38	38	76	66歳	35	64	99
12歳	34	38	72	67歳	45	52	97
13歳	40	51	91	68歳	37	55	92
14歳	43	39	82	69歳	33	33	66
15歳	29	40	69	70歳	28	31	59
16歳	35	32	67	71歳	30	46	76
17歳	36	38	74	72歳	26	38	64
18歳	31	26	57	73歳	21	43	64
19歳	21	23	44	74歳	16	25	41
20歳	36	23	59	75歳	23	36	59
21歳	21	28	49	76歳	23	26	49
22歳	18	40	58	77歳	24	18	42
23歳	22	42	64	78歳	18	23	41
24歳	19	41	60	79歳	6	25	31
25歳	21	32	53	80歳	12	18	30
26歳	20	32	52	81歳	12	11	23
27歳	32	25	57	82歳	9	16	25
28歳	21	37	58	83歳	8	18	26
29歳	32	27	59	84歳	11	11	22
30歳	36	30	66	85歳	11	12	23
31歳	38	38	76	86歳	3	12	15
32歳	34	38	72	87歳	7	10	17
33歳	42	29	71	88歳	2	10	12
34歳	41	42	83	89歳	3	6	9
35歳	50	46	96	90歳		6	6
36歳	41	33	74	91歳	1	5	6
37歳	47	33	80	92歳		2	2
38歳	51	45	96	93歳	1	4	5
39歳	34	39	73	94歳	1	1	2
40歳	51	42	93	95歳		1	1
41歳	46	44	90	96歳			
42歳	50	37	87	97歳		1	1
43歳	39	59	98	98歳		1	1
44歳	36	34	70	99歳			
45歳	17	22	39	100歳			
46歳	24	30	54	101歳			
47歳	31	32	63	102歳			
48歳	31	33	64	103歳			
49歳	40	40	80	104歳			
50歳	35	32	67	105歳			
51歳	35	38	73	106歳			
52歳	27	41	68	107歳			
53歳	40	44	84	108歳			
54歳	30	54	84	109歳			

第六章 人口・世帯

世帯数 2,194
男 2,846
女 3,199
計 6,045



年齢・男女別人口（昭和60年国勢調査）

二 産業構造

霧島町の産業は、昭和十年代までは農業と林業が主体であった。霧島山系の木材（炭坑の坑木・木炭・建築材など）の県外移出も多く、林業就業率も高かった。

昭和六十年（一九八五）の国勢調査によると、次の表・グラフで示すとおりである。



職業別就業人口（昭和60年国勢調査 合計 3,062人）

産業別就業者数

(国勢調査)

年次	昭和50年国調			昭和55年国調			昭和60年国調		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女
総数	3,051 ^人	1,673 ^人	1,378 ^人	3,171 ^人	1,722 ^人	1,449 ^人	3,062 ^人	1,702 ^人	1,360 ^人
第1次産業	1,184	632	552	1,009	521	488	858	491	367
農業	1,133	586	547	948	465	483	814	451	363
林業・狩猟業	48	43	5	53	49	4	40	36	4
漁業・水産養殖業	3	3	—	8	7	1	4	4	—
第2次産業	570	373	197	709	492	217	698	462	236
鉱業	2	2	—	1	1	—	1	1	—
建設業	271	242	29	425	376	49	320	286	34
製造業	297	129	168	283	115	168	377	175	202
第3次産業	1,286	665	621	1,453	709	744	1,506	749	757
卸売業・小売業	334	161	173	408	179	229	386	186	200
金融業・保険業	30	18	12	23	14	9	19	9	10
不動産業	122	116	6	138	127	11	104	98	6
運輸・通信業	16	15	1	7	7	—	4	4	—
電気・ガス・水道・熱供給業	680	277	403	751	290	461	856	354	502
サービス業	104	78	26	126	92	34	127	91	36
分類不能の産業	11	3	8	—	—	—	—	—	—

第七章 地名

第一節 大字・小字名

霧島町は、田口・大窪・川北・永水の四大字と、一八二の小子から成り立っている。以下はその字名である。

○大字田口 小字数八九

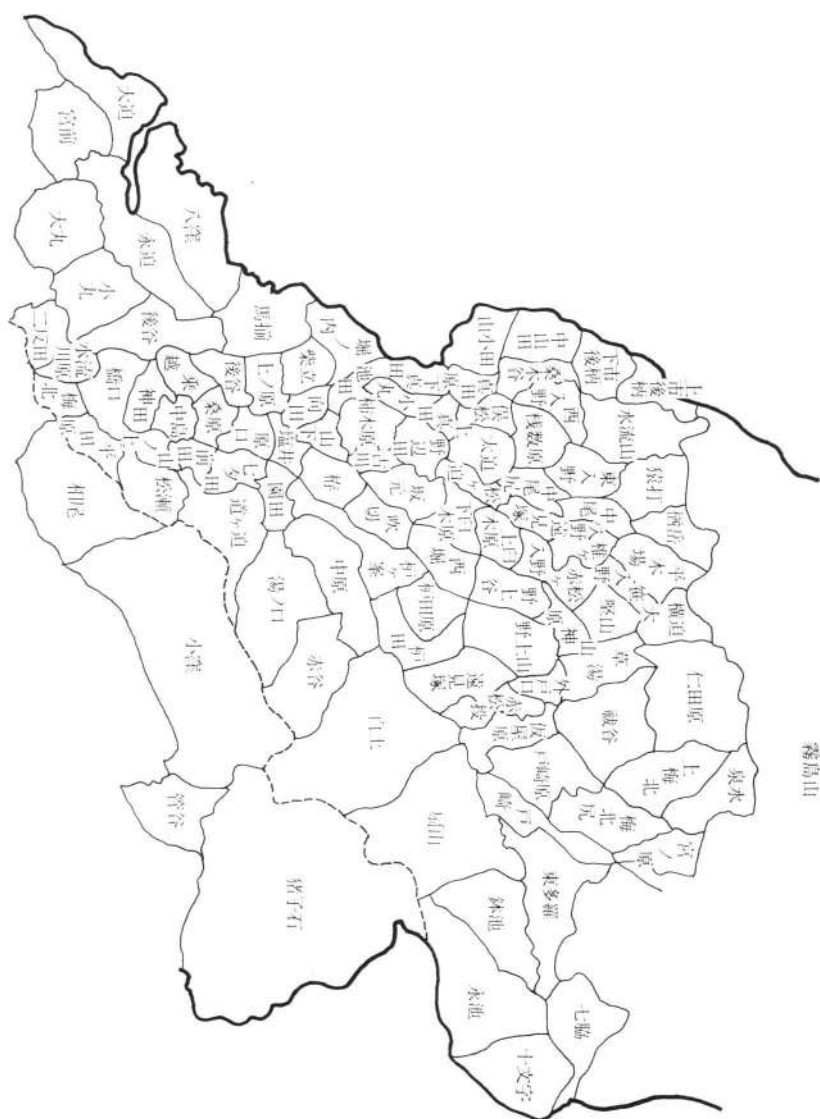
- | | | | | |
|--------|--------|---------|---------|--------|
| 桑木谷 | 40 中山田 | 41 下市後柄 | 42 上市後柄 | 43 水流 |
| 中尾尻 | 35 中尾 | 36 東入野 | 37 棧敷原 | 38 西入野 |
| 29 小山田 | 30 真田原 | 31 俣松 | 32 上真田 | 33 大迫 |
| 原 | 24 古川 | 25 坂元 | 26 野辺田 | 27 小丸 |
| 山下 | 19 向園 | 20 柴立 | 21 堀之内 | 22 池田 |
| 後谷 | 13 上之原 | 14 塩井 | 15 園田 | 16 東 |
| 島 | 7 乗越 | 8 桑原 | 9 前田 | 10 七夕田 |
| 1 梅北 | 2 半田原 | 3 橋口 | 4 神田 | 5 山之上 |
| | | | 6 中 | |

○大字大窪 小字数一八

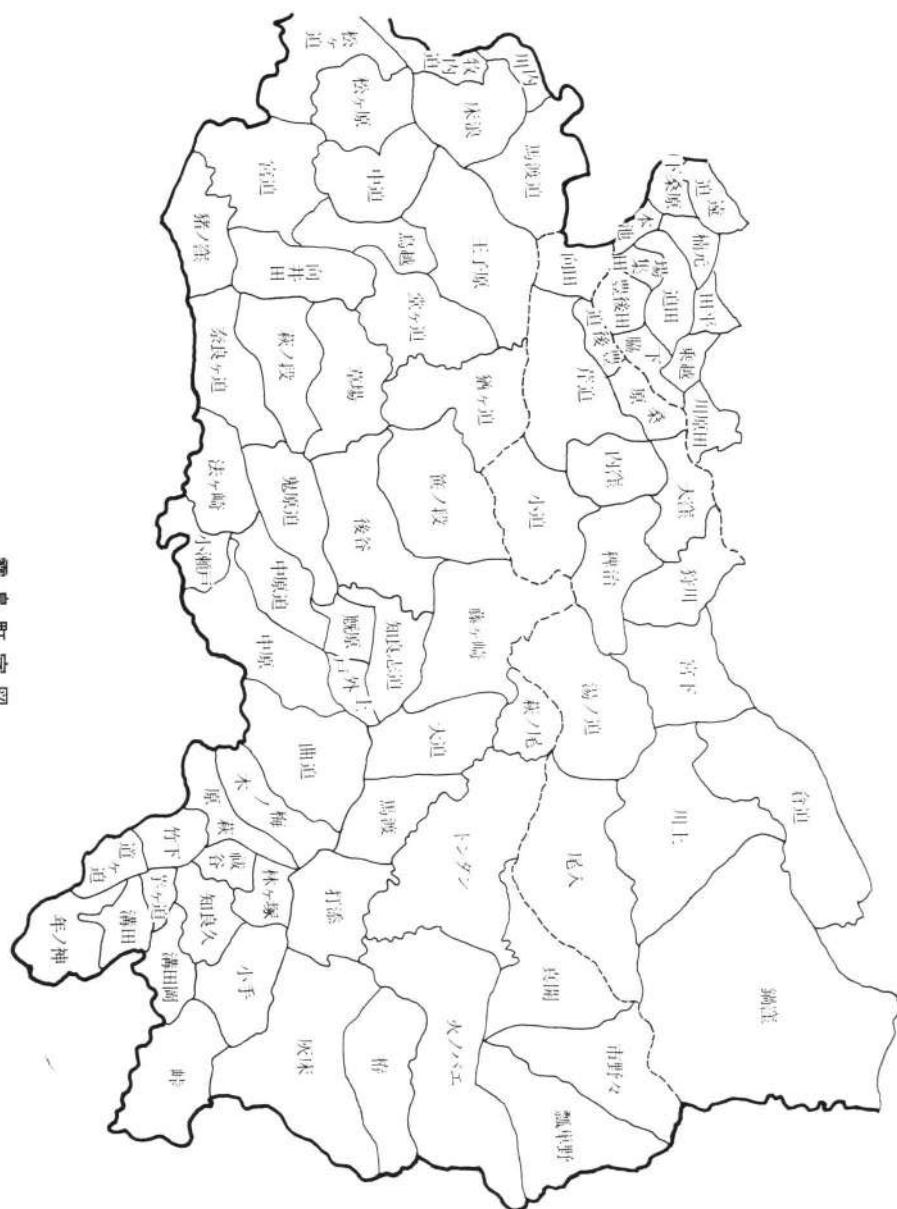
- | | | | | | |
|-------|-------|--------|---------|-------|-------|
| 1 向田 | 2 豊後迫 | 3 桑原 | 4 大窪 | 5 狩川 | 6 相尾 |
| 7 宮下 | 8 小窪 | 9 猪子石 | 10 倉迫 | 11 管谷 | 12 鍋窪 |
| 13 川上 | 14 尾入 | 15 湯之迫 | 16 小迫糠治 | 17 内窪 | 18 |

○大字川北 小字数二二

- | | | | | | |
|---------|--------|--------|---------|---------|-------|
| 山 | 44 猿打 | 45 横岳 | 46 平木場 | 47 大笹入野 | 48 椎ヶ |
| 入野 | 49 柳渡 | 50 赤松迫 | 51 下臼木原 | 52 上臼木原 | |
| 53 赤松入野 | 54 堅山 | 55 横道 | 56 草場 | 57 山神原 | 58 |
| 野上谷 | 59 西堀 | 60 吹切 | 61 柄ヶ峯 | 62 柄田 | 63 杉田 |
| 原 | 64 野上山 | 65 遠見塚 | 66 赤松段 | 67 外戸口 | 68 飯 |
| 屋原 | 69 戸崎原 | 70 祓谷 | 71 仁田原 | 72 上梅北 | 73 梅 |
| 北尻 | 74 泉水 | 75 宮之原 | 76 戸崎 | 77 東多羅 | 78 大脇 |
| 79 霧島山 | 80 十文字 | 81 永池 | 82 鉢池 | 83 扇山 | 84 白 |
| 土 | 85 赤谷 | 86 中原 | 87 湯之口 | 88 道ヶ峯 | 89 待世 |



霧島町字図



1 下桑原	2 本地	3 迫田	4 場集田	5 豊後迫	6
7 前田	8 川原田	9 二反田	10 水流川原	11	
12 小丸	13 大丸	14 鳥越	15 宮前	16 楠元	17
18 迫田	19 田平	20 永迫	21 八窪	22 馬揃原	
○ 大字永水 小字数五三					
1 川内	2 小瀬戸	3 法ヶ崎	4 中原迫	5 中原	6
7 梅之木	8 萩原	9 萩谷	10 竹下	11 道ヶ迫	
12 年之神	13 溝田	14 溝田岡	15 知良久	16 林ヶ塚	
17 小手	18 峠	19 灰床	20 梶	21 火之八重	22 瓢箪野
23 市野々	24 真開	25 打添	26 馬渡	27 トンダン	28
29 萩尾	30 大迫尻	31 藤ヶ崎	32 笹之段	33 後	
34 知良志迫	35 上外戸	36 厩原	37 鬼ヶ迫	38 奈	
39 萩之段	40 草場	41 猶ヶ迫	42 堂ヶ迫	43	
44 向井田	45 宮迫	46 猪之窪	47 松ヶ迫	48 松	
49 中道	50 王子原	51 馬渡迫	52 床浪	53 牧内	

第二節 町内の地名

地名には、なんらかのいわれのあるものが少なくな
い。ここにそのいくつかをあげてみよう。

一 ムナソイ坂

『日本書紀』に「瓊々杵尊降_ニ到於日向穗日高千穂_一」
而_ツ齊_シ胸_ハ副_ソ国、自_ニ頓_ヒ丘_一、覓_レ国行去_ニ到_ニ於吾田長屋笠狹御
碕_一とある。胸副坂は入水岐れ東方の坂だという。坂
を登れば遠く野間岳、笠砂の御碕が一望に眺められる。
「瓊々杵尊も此処より西望して笠砂に至り玉へるなるべ
し」(三国名勝図会)。胸は空虚の意味で副は片寄る丘と
いう。つまり、やせ地に片寄る不毛の地を言ったもので
あろう。

現在この道は廃道となっている。

二 文字丘

霧島神宮七不思議の一つ、文字石のある付近の丘である。

三 永池

「三国名勝図会」に「田口村霧島山中にあり、東西五十間南北十五間、深さ十三尋」とある。この池はその後埋め立てられて水田となっていたが、国道改修の際大部分はその敷地となり、残った水田はわずかである。永池は地区公民館名となっている。

四 鉢池

同じく「同村霧島山中にあり、東西六十間、南北三十間、深さ三尋」とあり、永池の南隣にあったらしいが、これも埋め立てられて沼沢地となり、池の名は小字名となっている。

五 祓谷

県道開通前は霧島神宮参拝の本道は田口天子神社下から吹切、野上神社、祓谷を通り坊主墓付近で川を渡って神宮に通じていた。参拝者は祓谷でお祓^{はらい}を受けて参拝していたからこの地名となったという。

六 桂内

桂久武が慶応三年からこの地の開拓に着手してから入植者が殖え、この地名となった。現在の集落では遠見松・祓谷・新梅北・高千穂・泉水がこの中に含まれる。

七 辻

現在の田口である。昔竜泉寺付近に辻堂があったと伝えられてこれが地名となった。長くこの付近の集落名となっていたが、昭和二十五年田口と改称された。

八 稚子石坂

天子神社下から吹切に登る坂をいう。坂の途中に「稚子石」と呼ばれる石塔があることから、この名が生まれたものであろう。

九 待世

昔霧島神宮が噴火のため焼失したので、御神体を今の「待世神社の跡」の地に移し、仮宮を建てて、その後二五〇年の間ここに祭ってあった。その間祭神・地区民共に噴火がやみ静かな世になることを待ったため待世の地名が生まれたという。

一〇 半田

現在の新地・待世・梅北の区域を一括して半田という集落になっていたが、昭和十二年、待世と改称しさらに終戦後新地・待世・梅北の三つの集落に分かれた。

半田の地名は半田原という小字名となって残っている（大田小と霧島中の間）。

一一 地藏坂

新地の田中博之氏方と川畑寛高氏方の間の坂をいう。近くの路傍に首無地藏があるからだといわれている。

一二 狩集（カアヅマイ）

農協本所付近の旧地名、昔、狩りをする人たちがいったんこの地に集まって協議、打ち合わせをしてから、それぞれの狩場に向かったところからこの地名となったと伝えられている。この地名は他町村にもある。今は地名としては残っていない。

一三 馬揃原（マゼンハイ）

川北永迫・待世・田口・堀之内・牧園町持松にまたがる広い区域をいう。昔から明治初年ころまでこの地域に

共同放牧場があったと伝えられており、この地名が生まれたものであろう。

一四 鼻立原（ハナタツバイ）（花立原）

「三国名勝図会」に「往古霧島嶽に佐野牧とて神牧ありしに霧島嶽火を發して焚し故、衆馬重久村鼻立原といえる所に群集せり。因て此地に苑を置きて養うといへり。此苑三分一は清水村に係る」とある。この地名は小字名となっている。豊後追上田信一氏宅付近である。

一五 王子原・王子坂

豊後迫の徳田盛常氏の宅地内に、貴人の墓と伝えられる石塔があるので、これにちなんだものであろう。

第三節 自治公民館

本町は行政区として四一の自治公民館があり、小は五世帯から大は一四五世帯までさまざまで、自治公民館長は行政の駐在員を兼ねている。自治公民館名、班数は次のとおりである。○印は行政連絡用の有線放送施設を示す。

自治公民館名	班数	有線放送施設	自治公民館名	班数	有線放送施設
牧神	六	○	川北	五	○
牧内	一		大窪	八	○
入水	五	○	大窪団地	二	○
笹之段	六	○	サンビレッジ団地	四	○
梅ノ木	二	○	駅前	七	○
市野々	五		梅北	五	○
永野田	一	○	湯之宮	九	○
北永野田	二		待世	四	○
上春山	一		新地	三	○
床浪	一		労災宿舍	一	
向田	五	○	田口	二	○
豊後迫	五	○	堀之内	六	○

市後柄	自治公民館名	班数	有線放送施設
狭名田		一	
朽田		七	
野上		八	
遠見松		四	
高千穂		四	
榎谷		四	
新梅北		三	
泉水		二	
峯之前	自治公民館名	班数	有線放送施設
霧島		一	
東多羅		三	
永池		四	
労災病院		一	
杉安病院		一	
軽費老人ホーム		一	
遠見塚団地		一	